

私たちのシステムづくり

医療との連携のための取り組みには、さまざまな方法があるはずだ。
全国各地で行われている9つのシステムづくりを実施主体別にまとめてみた。

+

地域包括支援センター

+

保健福祉センター、 地域の医師と協働で 「医師が参加するサービス 担当者会議」を実現

静岡市駿河区長田地域包括支援センター
(静岡県静岡市)

静岡市駿河区長田地域包括支援センターでは、平成18年から「医師が参加するサービス担当者会議」のコーディネートを行っており、20年度までの3年間で計127回にわたって開かれた。いったいどのような経緯で実現した取り組みなのか、詳細をみていこう。

+

実質的な連携をはかる仕組みづくり

きっかけは18年の介護保険制度改正だった。開設されたばかりの地域包括支援センター長の一瀬文則さんと長田保健福祉センター所長（当時）の飯塚恵子さんは、制度がより複雑化するなかで地域の高齢者に必要なサービスを届けるには、これまで以上に保健・医療・福祉の緊密な連携が重要との認識を共有していた。そこで、三者の連携のために何かできないだろうか、かねて保健福祉センターと協力関係にあった岩橋宏医師に相談をもちかけたところ、長田地区で医院を開業しており、静岡市静岡医師会の介護保険委員会の委員でもある福地康紀医師を紹介された。早速、一瀬さんと飯塚さんが福地医師のもとを

訪れ相談すると、医師がサービス担当者会議に出席可能となるシステムをつくれば、医師も積極的に参加してくれるであろうし、実質的な連携をはかることができるのではないかと、との意見が出された。

相談した二人も想像していなかったアイデアが提案された背景には、福地医師の自院での取り組みがあった。「実は4、5年前から毎月、当院の通所リハビリを利用している患者さんについての情報交換会をケアマネジャーとの間で行っていたのです。私も同席し、リハビリの状況とふだんの生活の様子、医療面に関する情報が共有され、スムーズな連携がとれるようになっていました」（福地医師）

そして話し合いの結果、次のような「長田地域高齢者支援連絡会」の構想が固まった。

- 開催頻度は月1回程度とする
 - 開催日時は平日の夜、午後7時～9時まで
 - 2部構成とし、1部は高齢者支援にかかわる情報提供と課題解決のための協議、2部は医師を交えたサービス担当者会議を行う
 - 会場は長田保健福祉センターを利用する
- その後、一瀬さんと飯塚さんは再び岩橋宏医師のもとへ赴いて構想を伝えるとともに、医師会の長田地区の会員に宛てて「連絡会」への協力依頼の文書をしたためてもらった。地域のケアマネジャーへの周知は、包括センターと静岡ケアマネ協会の地区担当の運営委員が協働で行った。

こうして18年8月8日に第1回目の連絡会が開催された。ケアマネジャー24名、医師13名のほか行政関係者も含め49名が集まった。

ここで改めて開催までの経緯と次回以降に実施するサービス担当者会議の持ち方などについての説明と質疑応答が行われた。

サービス担当者会議開催までの流れは以下のようにしている。

- ① 包括センター所長の一瀬さんが地域の医師と相談しながら次回の開催日を決める。
- ② 包括センターから各居宅介護支援事業所へFAXにて案内文を送る。
- ③ ケアマネから担当者会議を開きたい利用者名、主治医を書き込んだ返信が届く。
- ④ 包括センターから各主治医へ、連絡会の開催日時と担当者会議を開催したい利用者名をFAXにて連絡する。
- ⑤ 各医師より参加の可否が届く。
- ⑥ 医師の参加の可否(＝担当者会議開催の有無)を各ケアマネに連絡する。
- ⑦ 担当者会議開催となったケースについて、ケアマネは参加者の調整を行う。
- ⑧ ケアマネからの報告を受け、包括センターは当日のプログラムを組み、案内文をケアマネと主治医に発送する。
- ⑨ サービス担当者会議の開催。

➤ 「顔の見える関係」が連携の出発点

翌9月21日には、第2回目の連絡会が開催され、3名の医師の出席のもと10件のサービス担当者会議が行われた。その後も、コンスタントに2～5名の医師が出席し、サービス担当者会議が開催されていった。

「長田地区で活動している約25名のケアマネジャーはほぼ全員、連絡会で担当者会議を聞いたことがあります」(一瀬さん)

当のケアマネジャーは、この取り組みをどう評価しているのだろうか。たびたびケースを出してきたケアマネジメントステーション

▲15年度の活動を振り返る「報告会」の様子(19年6月12日)



丸子の里の大石朱実さんは、「医師の存在が身近に感じられるようになった」と言う。

「以前はどうしても医師に連絡をとるのを躊躇しがちでしたが、連絡会で直接話をする事で意識が変わり、ほかのケースでも積極的に連携がとれるようになりました」

一方、医師側にもメリットを感じる点はあるようだ。「診察室では見ることができない患者さんの自宅での生活を聞くことで、キャラクターがわかりますし、病状に関する思わぬ発見をすることもあります」(福地医師)。なかには連絡会への参加をきっかけに、空いている時間帯に自院での担当者会議の開催を受け入れるようになった医師もいるという。

長田地域での取り組みに刺激を受け、20年度からは市の北部地域でも、北部保健福祉センターと茨区（旧長田）の慶機、美和の2包括センターの協働による「北部地域高齢者支援連絡会」が始まった。「北部では隔月での開催ですが、居宅のケアマネだけでなく、包括センターと医師の連携にも連絡会は効果を発揮しています。最近ではドクターから相談がくるケースも増えています」(静岡市葵区慶機地域包括支援センター・金森久美子さん)。

「顔の見える関係」をつくる取り組みは着実に広がりをを見せている。